

「ブルジョア史学」と
「マルクス主義史学」の狭間で

土 肥 恒 之

目 次

はじめに	1
I マルクス主義歴史家の養成	2
① 赤色教授学院	2
② ラニオン歴史研究所	6
II 歴史家たちの30年代	9
① プラトーフ事件	9
② ポクロフスキーと彼の学派批判	12
III 「ブルジョア史学」と「マルクス主義史学」の狭間で	15
① ドルジーニン	15
② アンドレーエフ	19
③ ノヴォセリスキー	23
参考文献	29

はじめに

「十月革命」に代って、「十月政変」という表現があらわれてからすでに久しい。言うまでもなく、1917年10月(旧ロシア暦)にロシアの首都ペトログラードに勃発した「事件」、世界史の行方を変えた「ロシア革命」の評価をめぐる問題である。「十月政変」はいまだ新聞・雑誌などに散見される程度であって、とても「市民権」を獲得したといえないだろう。だが、他方で「革命」とその担い手たち、そしてその後の歴史過程に対する否定的な見解はすでに定着しており、内外のロシア現代史家はその暗部の具体的諸側面の分析にしを削っているといっても過言ではないのである。

そして「ソ連史学」も例外ではない。ポリシェヴィキの権力掌握と同時に生まれた「マルクス主義史学」の形成にかかわる影の部分が次ぎつぎと明るみにだされているのである。本稿は、このような最近の批判的研究に学びながら初期の「マルクス主義史学」の歩みをたどろうとするものだが、とりわけ「旧いブルジョア史学」との研究上の、そして人的なつながりに留意して作業をすすめることにしたい。というのも、表面的な批判はともかく、実質的には革命前の歴史学の伝統の中で育ち、関連諸史料にかんする広汎な知識と高度な研究技能を備えた「旧いブルジョア史学」の担い手たちが「新しいマルクス主義歴史家」に与えた影響は深く浸透したのであり、この点を抜きにしては後者の「成果」も正当に評価できないと考えられるからである。本論に入るまえに、まず「十月革命」の時点における歴史家の一般的な状況について簡単な「序」を記しておくことにしよう。

「十月革命」が勃発した時、そしてレーニンのポリシェヴィキが権力を掌握した時、ただちにこれを支援したインテリはごく僅かであった。大学を含め高等教育研究機関につとめる学者たち、歴史家たちは生起した事件にまず当惑し、そして新政権に警戒的であるか、敵対的であった。ポリシェヴィキはここでも絶対的な少数派であったのである。事件から20日余りたって、ペトログラードのカデット系の新聞にのせられた『学者たちの呼びかけ』は、この「革命」をロシアを襲った「大きな災難」ととらえ、ソヴェト権力の不承認を呼びかけた。この訴えの起草者は当時54歳のアカデミー会員でもある著名な歴史家、ラッポ＝ダニレフスキーであった。同じ頃、モスクワ大学でも教授団によるソヴェト権力の不承認の声明がだされ、この動きはカザン大学、ハリコフ大学などの地方大学へと波及していった。新政権の不承認とともに、「純粋に非党派的な学問的関心を守る」、「あらゆる偶然性から自治とノーマルな仕事を確保する」ためのインテリたちのこうした必死の行動が新政権にとって危険な、反革命的な性格をもつものとされたのは当然であった。

「革命」に敵対するインテリをそれに奉仕するインテリへ改造する試みは、こうして最初から困難な壁につきあつた。旧教授団の中に「隠れた敵」、「潜在的な反革命支持者」をみた新政権

はしばしば逮捕、免職、アパートからの追放(詰めこみ)、そして強制労働などの抑圧的措置をとった。首都では飢えと寒さのため人口は激減したが、先に言及したラッポ＝ダニレフスキーは1919年2月に餓死した。翌年には優れた古文書学者シャフマートフも斃れた。こうしてインテリの多くは精神的にも物質的にもきわめて困難な状況に立たされたのである。

ところで、かつてソ連史家の一人は「革命」の時点における「歴史学における非マルクス主義陣営」を次の3つに区分して、それぞれに当時の著名な歴史家を当てはめた。

- ① 反動的, ブルジョア・立憲的傾向
- ② ブルジョア史学の進歩的, 民主的潮流
- ③ 小ブル的, メンシェヴィキ, エスエルの傾向

だがこうした区別は、例えば①と②とが「革命」後マルクス主義史学に近いのか否か、が基本的なメルクマールとされているふしがあること、そして③に含まれる歴史家さえごく少数であったこと、こうした点においてほとんど意味を持たないだろう。ここでは「革命」を支持した歴史家はひと握りであり、圧倒的多数はそれに否定的であったことを確認しておくだけで十分である。そしてポクロフスキーを筆頭とするこうしたひと握りの歴史家による、政権の全面的なバック・アップを支えとした歴史学のマルクス主義化、という未曾有の企てがはじまるのである。

I マルクス主義歴史家の養成

① 赤色教授学院

1918年7月、モスクワでマルクス主義思想の習得のための2週間の講習会が開催された。これがのちの「スヴェルドロフ名称共産主義大学」のはじまりである。基本課程3年(短期は1-1.5年)の共産主義大学は、その後、1921-23年のあいだにペトログラード、サラトフ、ロストフ・ナ・ドヌーなど10カ所に開設され、党の古参活動家が講師をつとめた。スヴェルドロフ大学は1923年夏、最初の卒業生を出したが、その多くは主に地方の「ソヴェト・党学校」の指導者として派遣された。「スヴェルドロフカ」の一人で、のちの革命史家シードロフによると、ポクロフスキーの講義(「ロシア史」, 「ロシア史学史」)は簡潔にして明瞭で人気があり、いつも大講堂が一杯になったという。彼はそこで自説の「モノマフの帽子をかぶった商業資本」を論じた。この他に世界史をルーキンが、哲学をデボーリンが、そして農業史をリャンチェンコが各々担当した。大学の「講師コース」は、マルクス主義史家への最初のステップとなったのである。モスクワには、この他に2つのユニークな共産主義大学があった。主に東方(アジア)諸国のソヴェトと党で働くものための人材養成機関として、日本からも学生が送りこまれた、いわゆる「クートベ」, そして西欧の少数民族の出身者のための共産主義大学である。共産主義大学は、1930年の時点で40校を数え、約21,000人がそこで教育を受けたのである。

以上のような、むしろプリミティヴな「大学」の開設と並行して、マルクス主義思想に基づく



ポクロフスキー (1868-1932)

より高度な学術研究機関、そして社会科学者の人材養成のための機関が設けられていった。その最も重要なものが1921年10月にモスクワに設立された「赤色教授学院」に他ならない。学院は三学科(経済、歴史、哲学)と「労働者予科」修了者のための特別コースをもったが、学院長ポクロフスキーはここを高度な質をもったマルクス主義歴史家の養成機関とする、という明確な目標を掲げたのである。

赤色教授学院の第一期生は105名(うち93名が正規生)であった。彼らは3年(のち5年)以上の黨員歴、学問研究の能力、そしてソヴェト並びに社会での労働経験、という入学資格にパスしたものであった。初期にはスヴェルドロフ大学の「講師コース」の出身者が多数を占めた

※ 入学者（1921-28年）

	総数	歴史学科
1921年	105	28
22	151	13
23	153	12
24	179	12
25	217	15
26	294	20
27	384	25
28	483	35

が、ほとんどの学生は党の学校をでていた。学生には高額
の奨学金が支給され、卒業生は高等教育機関で教育と研究
に従事する権利をうけた。歴史学科は1924年7月に最初
の卒業生をだしたが、そこにはヴァナグ、ドゥブロフス
キー、シェスタコフ、パンクラートヴァなどの初期のマル
クス主義史家の著名な名前をみつけることができる。赤色
教授学院の学生(イカピスト)は、その卒業生たちが指摘す
るように「エリート」であり、「前方にはすべての道が開か
れている」と感じていたのである。

学院の授業はゼミナル中心であって、講義も試験もなかった。歴史学科ではポクロフスキー
が「十月革命」と「史学史」、ルーキンが「世界史」、リヤシチェンコが「農業史」、ヴォルギンが
「フランス社会主義の歴史」、カレーエフが「史的唯物論」、を各々担当した。「ソ連邦史を我々
は、直接十月革命から、ヨリはやくとも19世紀から研究をはじめた」と卒業生の一人が語っ
ているように近現代史、それも革命運動史がゼミナルの中心的テーマであった。そうしたなか
で幾分ユニークなのがポクロフスキーの「史学史」のゼミナルであった。彼は1923年に刊行
した『階級闘争とロシア歴史文献』のなかでロシア史学史にかんする最初のマルクス主義解釈を
提示したが、1924/25年の学年暦から学院でも「史学史」のゼミナルを開始したのである。
1924年11月24日に聴講生であったネーチキナのエーヴェルスにかんする報告を皮切りにして
チチューリン、ソロヴィヨフ、ラヴロフ、シチャポフ、そしてクリュチュフスキーなどのロシア
歴史学の巨人たちの歴史観と歴史研究の批判的検討が企てられた。その成果はのちに彼の編集の
もとに刊行されたが、「史学史」は、ポクロフスキーにとって高度な技能をもった人材＝歴史家
の養成には不可欠な教科としてとくに重視されたのである。

赤色教授学院は、以上の解説からも明らかのように「大学院」に相当する高等教育機関であ
ったが、学位論文は義務づけられなかった。当初の3年間の修学期間が4年間に延長された
1925/26年度の学年暦から、4年度に残留した学生については学位論文の準備にあてることが
決定された。だがそれも義務ではなく、そして「誰もそれに大きな意義を与えなかった」。何よ
りも学生たちは多忙であった。ゼミナルでの年2回の報告という本来の仕事の他に、教育活
動は全学生の義務であった。例えば学院附属の「日曜大学」でモスクワの労働者党員の活動家
に対してマルクス・レーニン主義の教育にあたった他、各種の学校での教育活動を求められた。外
国の共産党の学校で教えるために外国出張(1-1.5年間)した学生もいた。また教育以外に、新
聞・雑誌あるいはパンフレットの発行などの「文筆労働」にも従事した。彼らは学生である前に
党員であり、その役割を期待されたのである。そしてその結果、学生たちはこの時代の激しい政
治闘争にもまき込まれた。1927/28年の卒業生の10%が「反対派への所属と積極的なトロツ
キー派の活動のために」党を除名された。学院の学生には学位論文の作成にまわす自由な時間が

決定的に不足していたのである。

赤色教授学院は1924/25年度から法学科，文学科そして自然学科を，そして1927/28年度から党史学科，翌年には東方学科を開設し，入学者は全体で500人に到達しようとしていた。こうした中で歴史学科は20名前後にとどまったが，1928年のポクロフスキーの報告によると，学院は5年間(1924-1928年)ですでに50名の歴史家(32名はソ連邦史，18名は西欧史)を輩出したのである。

以上のような正規の教育・研究機関とはちがって，1925年3月に発足した「マルクス主義歴史家協会」は29名のモスクワの「マルクス主義歴史家」のサークル活動を母体とする自主的団体であった。会員はしだいに増加し，1927年1月には178名，1928年1月には250名，そして1929年1月には399名にまで達した。また1929年末までに全国22都市に協会の支部が開設されたのである。1926年5月に刊行された雑誌『マルクス主義歴史家』はこの年に2回，翌年からは年4回，約2,000-3,000部を刊行した。雑誌には歴史研究の方法論そして具体的研究が掲載されたが，後者についてはロシア及び西欧の革命運動史が多くの頁を埋めた。ロシアの「革命的過去」を発掘し，研究する作業は新しい歴史学が最も精力的に推進したところだが，協会もまたこの課題を担うことになった。そして最初に取りあげられたのが「デカプリスト百年」を記念する研究活動であった。「記念報告」はデカプリスト運動に対するブルジョア・自由主義者の概念，そして階級的扱いの欠如を痛烈に批判したが，その多くは若い女性歴史家ネーチキナの手によるものであった。この他にも，プガチョフ反乱150年，チェルヌイシェフスキー生誕百年，そして第一次ロシア革命20年，大十月革命10年を祝う企画が相次いで立てられ，マルクス主義解釈が打ちだされていった。雑誌『マルクス主義歴史家』はその主要な舞台となったのである。

「マルクス主義歴史家協会」を指導し，そして雑誌に強い影響力を及ぼしたのは，ここでもポクロフスキーであった。革命史家にして組織家，宣伝家ポクロフスキーの才能は，ここにおいて最も明瞭に発揮されたのである。協会は1928年8月，ポクロフスキー生誕60年を祝った。彼の「愛弟子」の一人，ヴァナグは師を「プロレタリアートの歴史学を創りだし，…ロシアの歴史的過去の理解に革命をもたらした」とその業績を讃えた。その年の年末から一週間にわたって開催された「第一回全ソ同盟マルクス主義歴史家会議」において，ポクロフスキーは約600名の出席者(モスクワの諸機関28，他都市のそれ73からの)を前にして「レーニンの遺産」，「歴史研究のレーニ的方法」の活用がソ連歴史家の第一の課題たるべきことを強調した。「我々の模範はかつてチェルヌイシェフスキーであったが，今はレーニンである」。彼こそは「ロシアの歴史過程の理解のために，すべての『ロシアの大学』の歴史学講座のあらゆる権力者たちよりも多くをなした」からである，と。

協会はマルクス主義歴史家の養成機関ではなかったが，彼らの糾合，個々の研究所の仕事の連携，また歴史知識の普及という点でも大きな役割を果たした。だが30年代に入るとその性格は変わっていく。1932年4月には，協会は共産主義アカデミーに設けられた歴史研究所の附属機関

となり、もはや自主的団体ではなくなった。そして同年同月、協会の「魂」であったボクロフスキーを失った。協会は存続し、雑誌も刊行されつづけたが、性格はあきらかに変質したのである。

② ラニオン歴史研究所

帝政時代において歴史家の養成はもっぱらモスクワ大学、ペトログラード(旧サンクト・ペテルブルグ)大学をはじめとする幾つかの大学の歴史・文献学部、そして一部は法学部で担われていた。講座教授たちはすぐれた学生を毎年数名、卒業後も講座に残し、修士試験(論文を含む)のための準備に備えさせた。こうした「残留」制度に基づく歴史家の養成については、指導教授の圧倒的な影響力、身分的閉鎖性、そして限られた規模、などその「カースト的なブルジョア・貴族的性格」が指摘されてきた。「革命」政府は高等教育機関の民主化、とりわけ「人文系高等教育機関」の改組を緊急の課題として掲げた。だが「革命」直後はこれに着手する余裕はなかった。大学教授たちは自分の関心にしたがって仕事を続け、歴史教育と歴史家の養成についても旧来の手続きが踏襲された。下表はモスクワ大学歴史・文献学部の「残留学生」を示したものであるが、ここにも旧制度の存続がはっきりと示されている。

年度	1915	1916	1917	1918	1919	1920
人	64	66	58	67	45	40

だが、この間にも「人文系高等教育機関」の改組計画はすすめられていた。1919年3月、モスクワ大学とペトログラード大学の歴史・文献学部は解体され、新たに社会科学部が創設されたのである。学部は経済学科、政治・法学科、そして歴史学科に分けられ、1919/20年度の学年暦から歴史学科でもマルクス主義の諸科目(社会主義の歴史、K・マルクスとマルクス主義、社会諸形態の起源、など)が設けられた。教壇に立ったのはボクロフスキー、ヴォルギン、アドラツキーなど外部のマルクス主義者であったが、こうしてロシアの古い大学ではじめてマルクス主義が正規に教授されたのである。だが歴史学科の教育プラン全体は、いぜん「旧教授団」の手にあった。歴史家の世界観を形成するうえで「最も重要な講義」(「ロシア歴史学におけるロシア史の全体構想」)を担当していたのは、数年後に亡命を余儀なくされたクリュチェフスキー学派の一人、キゼヴェツテルであった。その他、モスクワ大学社会科学部全体で「宗教」にかんする講義は9つにのぼった。事情はペトログラード大学でもほぼ同じであったのである。

だが改組の方針は更に徹底された。1921年春、歴史学科に代えて社会教育学科が置かれた。こうして社会諸科学が教育プランの基礎におかれ、その必修化が定められたのである。だが肝腎の教授側の人材は決定的に不足していた。翌1922年、「すべての良き人材」をモスクワ、ペトログラード、サラトフ、ロストフの4大学に集中することが決定され、他の大学の社会科学部は廃止された。こうした中であって数年間、モスクワ大学で「史的唯物論」の講義を担当したの

がアドラツキーであり、ヴォルギンが「社会主義の歴史」、ミツケヴィチが「ロシア共産党(ボ)の歴史」を担当した。こうしたマルクス主義者だけが担当できる「重大な講義」の他に、まだマルクス主義者ではなかったリャンチェンコ、モロホヴェツが19世紀の農業問題と農民史を、そしてコスミンスキーも中世史の講義を担当した。

こうして社会教育学科からは、マルクス主義教育をうけた卒業生が年とともに大量に輩出され、その多くは高等学校の教師陣を形成した。だが学生の実態はその理想から程遠いものであった。1924年5月に実施された最初の検査によると、社会科学部の学生の15%が「成績不良」と「政治的理由」のために除籍された。大学はすでに「労働者予科」などを通して大量の労働者・農民の出身者を受け入れていたが、講義の重い負担、劣悪な生活条件、そして政治教育の「弱さ」といったさまざまな問題が生じていた。こうした点を是正するために入学試験や卒業論文の提出、あるいは優秀な学生については「抜擢」制度が設けられたのである。

歴史・文献学部の解体、そして社会科学部の創設はそれ自体、旧来の歴史学と歴史家の存立基盤を大きく揺るがすものであったが、1920年11月に設けられた通称ロートシュテイン委員会(「共和国の高等教育機関における社会科学教育の根本的再編にかんする委員会」)は、より具体的に大学教授の再教育と人材養成にかんする諸問題を検討した。委員会はレーニンの方針(「…彼らの各々からマルクス主義文献の基礎知識を要求しなさい。マルクス主義の特別の試験にパスしない者は、教育の権利が奪われるだろうことを通告しなさい。…明確なプログラムで彼らを縛りなさい。彼らに客観的に我々の観点に立たざるをえないようなテーマを与えなさい」)をうけて、「専門家=非共産主義者」が共産主義者の監視の下で仕事をすることを決定した。また委員の一人であるポクロフスキーは従来の人材養成の「クスターリ的方法」を批判して、「社会的・計画的選抜」を提案した。そしてこの二つの基本問題は1921年にモスクワ大学の附属施設として設立されたロシア社会科学研究所協会(頭文字をとってラニオンと呼ばれた)歴史研究所の在り方をめぐって具体的に展開されたのである。

歴史研究所設立の計画は1919年5月にはじまり、2年後の9月には所長としてモスクワ大学教授でヨーロッパ中世史の大家ペトルシェフスキーが選出された。構成は正会員15名と研究員25名が定員とされたが、1922年1月の段階で正会員は以下の12名であった。ボゴスロフスキー(ロシア近世史)、エゴロフ(ヨーロッパ中世史)、コスミンスキー(ヨーロッパ中世史)、ルーキン(ヨーロッパ現代史)、リュバフスキー(ロシア中世史)、ペトルシェフスキー、ピチョータ(ロシア中世史)、プリゴロフスキー(ヨーロッパ古代史)、サーヴィン(ヨーロッパ中世史)、セルゲーエフ(ヨーロッパ古代史)、ストロジェフ(スラヴ文献学)、ウダリツォフ(ヨーロッパ中世史)。ヨーロッパ史家が12名中8名を占めていることも特筆に値するが、ここではマルクス主義歴史家は37歳のルーキン唯一人であったことに注目しよう。換言すると、研究所は「ブルジョア史学の砦」となる可能性があった。事実、正会員の研究テーマの選択が「革命」前からの個人的関心に発していることにしばしば危惧の念がもたれたが、なかば放任されたのである。

他方で研究員については「第一種」と「第二種」に分けられた。前者にはすでに自主的な研究・教育活動に入っている若手の歴史家が所属し、後者にはより若い、養成過程にある大学院生クラスが所属した。正会員とは異なって、彼らにはロートシュテイン委員会の方針に沿った「新しい課題」が押しつけられた。まず第一種研究員に対しては、マルクス主義の基礎を習得すること、そしてそれに基づく学問研究方法の習得の証明を求められた。それが無いものは生活上の優遇措置を受ける権利を一定期間失うことになった。自主性を尊重しながらも、条件をつけたのである。第二種研究員には更に厳しい条件が設けられた。1924年春から、いわゆる「マルクス主義ミニマム」が設定された。すなわちマルクス主義文献の最低限の習得が義務づけられ、更にその試験への合格が求められたのである。このため研究所ではマルクス主義歴史理論についての特別ゼミナールが設定され、そこへの出席が義務づけられた。研究所にはヨーロッパ現代史を専攻するルーキン以外にはマルクス主義歴史家はいなかったから、ヴォルギン、リャザノフ、ミツケヴィチなどが派遣され、ゼミナールを担当したのである。

第二種研究員(大学院生)は、こうして専攻分野について三年間の研究教育ののち、学位論文のために更に一年間の優遇期間(奨学金付き)が与えられた。また年長クラスの全員がモスクワの高等教育機関での教育活動を義務づけられた。こうした幾つかの点において、我々は既述の赤色教授学院の歴史学科との類似を指摘できるだろう。だが両者のあいだには根本的な相違があった。歴史学科の学生にとってはマルクス主義の習得は当然の前提であり、その担い手としての役割が自覚されていたのに対して、歴史研究所の大学院生にとっては必ずしもそうではなかった。彼らにとってマルクス主義の習得はむしろ義務であり、研究所で実施される検査も形式的なものにとどまった。すなわちマルクス主義方法論のゼミナールへの出席、あるいは著述における「マルクス主義の言葉」の使用などが問われたのであり、その質的な側面には向けられなかった。こうした中で政府の人民委員部からラニオンではマルクス主義的な人材養成を保証されない、という声があがったのも無理からぬところであった。1928年はじめから、歴史研究所は政府のイデオロギー組織指導部から特別の関心の対象とされた。そこはブルジョア的世界観と科学の砦であり、それ故マルクス主義教育をうけた学者の養成は不可能とみられたのである。

1928年と3月と4月、マルクス主義歴史家協会は2度にわたって、歴史研究所長ペトルシェフスキーの名著『ヨーロッパ中世経済史の概要』をめぐる討論会を開催した。こうした会合は稀ではなかったが、著者欠席のまま開かれた今回の討論会の狙いは明白であった。歴史研究所内における反マルクス主義学派の存在の証明、これが討論会の目的であった。1924/25年度から「第二種研究員」となったペトルシェフスキーの弟子ネウシヒンは、マルクス主義方法論を援用して師の学問的創造性を擁護したのに対して、赤色教授学院の学生フリードリャンドはその中に「マルクス主義の無理解の典型」、「悪質なアカデミズムの典型」をみて攻撃した。討論会はペトルシェフスキーに西欧のブルジョア学者(アルフォンス・ドーブシュ、マックス・ヴェーバー)のたんなる「解釈者」という評価を下したのである。マルクス・レーニン主義の純粹さを掲げる

マルクス主義歴史家協会は、「歴史前線」の「完全な見解の一致」、「異論への非寛容」への姿勢を強めていた。協会の指導者たちは、ラニオン歴史研究所の非党員研究者や彼らの弟子たちに対して無遠慮な権威失墜を画策した。ペトルシェフスキーの著書をめぐる討論会はその典型であったのである。

討論会から1年後の1929年4月、ラニオンの閉鎖と共産主義アカデミーへの併合が決定された。そして10月に発足した共産主義アカデミー歴史研究所の正会員はボクロフスキー以下10人のマルクス主義歴史家が顔をそろえ、移籍した27人の大学院生を含む研究員の指導にあたることになった。1925/26年度に大学院生としてラニオン歴史研究所へ入所したチェレプニンは、この時「マルクス主義方法論の無理解」を理由に新研究所から除籍された。他方、「古いブルジョア史家」の一人で、クリュチェフスキーの後継者ボゴスロフスキーはラニオン歴史研究所の閉鎖が決定された4月に病死した。「革命」前の歴史学は、こうして制度的な基盤を失ったのみならず、相次いで人材を失った。その象徴的な出来事がいわゆる「プラトーフ事件」であった。

II 歴史家たちの30年代

① プラトーフ事件

ペトログラード大学教授プラトーフは最近げけにされた『自伝的覚え書』（執筆は1928年頃）のなかで「革命」以後十年余りの研究・教育生活を次のように淡々とふりかえった。

1917年の政変と1918年にはじまる旧体制の打破は私と私の家族を呑みこんだ。そして封鎖と飢えの時期にロシア社会が蒙った全面的な困窮のなかにあって、私は自分の蔵書も慣れ親しんだ定住も失うことはなかった。

16・17世紀ロシア史研究のすぐれた成果によって最も権威ある学者の一人として名声を享受し、そしてペテルブルグ大学時代に「ロシア史家のペテルブルグ学派」、あるいはもっと直截に「プラトーフ学派」という大きな学派をつくり出した彼は、「革命」後も学術に、とくにその行政面において重要な職責を担ってきた。1918年12月、「古ルーシ」期を中心に文献の蒐集と刊行にあたってきたロシア最古の学術機関の一つ、考古学委員会はプラトーフを議長に選出した。1920年4月には科学アカデミーがロシア歴史学における彼の大きな貢献に対して正会員に選出した。更にペテルブルグの著名な文学研究機関「プーシキンの家」は、1925年8月、プラトーフを所長に選び、そして同年、彼は科学アカデミー図書館長に就任したのである。

もとより旧来の学術機関がそのままの形での存続を許されたわけではなかった。例えば考古学委員会は1919年2月、その機関の自治をうたった規約を確認したが、その後定員が増されたう

え、研究報告などもはじまり、研究機関的性格が強められた。報告では、例えば研究員グレコフの場合のように、ロシア農民史あるいは「身分と階級の歴史」がテーマとして取り上げられるようになった。他方で、この「紙ききん」の時代にいぜんとして伝統的に『ロシア年代記』の刊行が優先され、革命前に着手されていた修道院アルヒーフの蒐集がつづけられた。だが同時に、デカブリスト百年を記念した史料集の刊行、そして更に1926年からは20世紀までのロシア史にかんする諸史料の出版もはじまった。考古学委員会は、こうして20年代後半に入ると大きく変質しつつあったのである。

だが問題は考古学委員会ではなく、プラトノフが館長をつとめる科学アカデミー図書館ではじまった。1929年11月はじめ、ペテルブルグの新聞は、そこにニコライ2世の退位にまつわる「重要な政治的ドキュメントが隠されていた」、と報じた。10月末から活動していた特別審査委員会の報告書によると、この「行政上の誤りと不正な行動」を犯した責任者はプラトノフ本人であり、彼の「中央古文書館(政府管轄下……筆者)の活動に対する疑い深い関係」の故に、最も貴重な歴史ドキュメントをそこに譲渡しなかったのだ、として科学アカデミーの常任委員会に彼の解任を求めた。というのも、1926年12月の規則によって科学アカデミー図書館の委員会は、その時点でアカデミーの諸機関にある資料の目録を届け出ること、そして新たに発見した資料についても追加報告することが義務づけられていたからである。だがこれを厳守することは無理であった。「革命」後、図書館には反革命活動家、エミグレ、重要な政治家などにかんする「アルヒーフの波」が押しよせており、いかなる学術的処理も事実上不可能であった。入庫の登録さえいつもなされたわけではなかったのである。したがってプラトノフの指示によるアカデミーの書庫における「重要な政治的ドキュメント」の「秘匿」というのは、本質的に悪意をもったものによる事件の捏造に他ならなかった。科学アカデミーの常任委員会は、しかしながらプラトノフの解任に同意を与えたのである。

だがプラトノフの解任は事件の発端にすぎなかった。11月24日に考古学委員会の研究幹事アンドレーエフが逮捕されたのを皮切りに、科学アカデミー準会員で図書館員ロジュストヴェンスキーが12月1日に、そしてプラトノフ自身も翌30年1月12日に、更に1月から2月にかけて、レニングラード大学教授ロマーノフ、アカデミー会員リハチョフ、同じくアカデミー会員タルレ、レニングラード大学教授ヴァセンコが相次いで逮捕された。そして最後はプラトノフに最も近い歴史家、アカデミー準会員ドルジーニンであり、6月25日に逮捕された。こうして、かつてプラトノフが長をつとめていた機関の「粛清」がすすめられた。レニングラードの考古学委員会そして科学アカデミー図書館には、いかなる専門家＝歴史家も事実上いなくなったのである。それだけではない。プラトノフ逮捕の8カ月後、事件はモスクワへ飛び火した。1930年8月から9月にかけて、モスクワ大学教授でアカデミー会員リュバフスキー、アカデミー準会員ゴーチエ、同じくエゴロフ、同じくヤコヴレフ、アカデミー正会員ピチョータ、同じくパフルーシンなどの一連の歴史家が逮捕された。もとより逮捕されたのは歴史家だけではな

かった。彼らといろいろなかたちで関わりがあったとされた研究教育機関の職員、旧将校、学校教師、出版局編集者、そして家庭の主婦までもがその犠牲となった。逮捕者は120名に及んだのである。

プラトノフをはじめ、タルレ、リハチョフ、リュバフスキーの4人のアカデミー会員がふくまれていたことから「アカデミー事件」とも呼ばれるこの事件の性格については、すでに基本的に明らかにされている。共産主義運動をすすめるなかで展望されていた世界革命への期待が消滅しつつあったこの時期、この国では権力の強化と民衆の政治「教育」の手段として政治裁判そしてテロルが登場した。その非難は、とくに「旧い」団体へ所属する代表者へ向けられた。プラトノフの逮捕理由は「積極的な反ソ運動と反革命組織への参加」であった。具体的には『自由ロシア再興のための闘争の全国民同盟』というソヴェト権力の打倒と立憲君主体制の再建を狙いとする組織をつくりだし、そしてその活動において指導的役割を果たしたというものであった。また他の逮捕者は組織のプロパガンダをなし、あるいは武装蜂起を準備する目的で『同盟』内に軍事グループをつくり、あるいは教区教会の信者たちに反ソ的、宗教的なプロパガンダをなし、あるいはソ連の政治状況についての資料をあつめて外部のものに流した、などのさまざまな理由をつけられた。また事件がモスクワへ飛び火したのはモスクワ大学教授、アカデミー会員ボゴスロフスキーとプラトノフとの近さにあった。彼は半年前に亡くなっていたが、モスクワにおける『同盟』の組織者にして推進者として位置づけられ、彼の同僚と弟子の多くが同様の理由によって逮捕されたのである。だが、改めて言うまでもなく、『同盟』は一度も存在したことはなかった。科学アカデミーには言われるような軍事組織や武器のストックなどはもとより、反革命陰謀も存在しなかった。外国のスパイと学者との密談もなかった。裁判のなかで明らかにされたこれらすべての出来事はシナリオ・ライターの純粋な空想の産物であったのである。

「アカデミー事件」はこの国の学問、歴史研究を担ってきたエリートたちを恐ろしい場面にまきこみ、そして侮辱の対象とした。まったく無防備な彼らの抗弁はいかなる「裁判官」の耳にも入らなかった。プラトノフには「5年間の流刑」が判決された。1931年8月、娘とともに流刑地サマーラへやってきた彼は1933年1月10日、急性の心臓病のためこの地で死亡した。享年73歳であった。プラトノフの下で考古学委員会の副議長にあったドルジーニンは当初、5年間のラーゲリ拘禁を判決されたが、のちに3年間の流刑に変更された。ロストフ・ヤロスラフ市での流刑生活ののち、「解放」されてレニングラードに帰ったが半年後の1936年1月亡くなった。この他リハチョフはアストラハン、ロジェストヴェンスキーはトムスク、アンドレーエフはエニセイスクへ流刑された。モスクワ・グループではリュバフスキーがウファー、ゴーチエがサマーラ(？)、ヤコヴレフがミヌシンスク、へ流刑された。「5年間の流刑」という判決は比較的軽いとみることができるかもしれない。だが「慣れ親しんだ定住」を暴力的に奪われて、万事に不如意な流刑地での生活は、とくに老人には苛酷であった。少なからずのものが流刑地で、あるいは「解放」間もなく命を落したのである。

他方で、モスクワとレニングラードでは共産主義アカデミー歴史研究所とマルクス主義歴史家協会が中心となって「大ロシア的なブルジョア歴史学」を糾弾する討論会議が相次いで開催され、若きマルクス主義歴史家たちが「歴史前線」において「妨害行為」をもたらした旧い学者たちの業績を「暴露」する報告をした(1930年10月から翌年2月にかけて)。当時、共産主義アカデミーの総裁はポクロフスキーであり、協会の直接的な指導者も彼であった。ポクロフスキーが「ブルジョア歴史家」の糾弾の先頭に立ったわけではなかったが、批判は彼の評価に基いて行なわれた。「アカデミー事件」全体においてポクロフスキーの果たした役割は決定的であったとみられるのである。

② ポクロフスキーと彼の学派批判

ロシア歴史学のマルクス主義化のために研究と組織の両面において強力な指導力を発揮してきたポクロフスキーは、1932年4月に64歳で亡くなった。サマーラに流刑されたプラトーフよりも一足はやくこの世を去ったのである。そして30年代には一転して「ポクロフスキーと彼の学派」に対する学術的というよりも、またしてもイデオロギー色の濃い批判が展開された。1939年と1940年に出版された2巻本の1,000頁をこえる批判論集には合わせて24本の論文が寄せられた。そこにはかつて「ブルジョア学者」としてポクロフスキーに追求され、見下されていたにも拘らず、そしてその後「マルクス主義歴史家」としてソ連史学を指導したグレコフ、バフルーシン、バジレヴィチなどとともに、かつてのポクロフスキーの愛弟子ネーチキナなども「恐らくは自主的に」参加した。プガチョーフ反乱に対するポクロフスキーの見解の詳しい分析、その強い側面と弱い側面の指摘は、ポクロフスキーの概念に立って発言してきた彼女にとって自己批判の意味をもつものだった。と同時に、そこには史料的基础づけを欠いた、むきだしの社会的シェーマだけの、歴史科学の発展に害悪を及ぼす「歴史の通俗化」、という師ポクロフスキーに投げつけられた一方的な非難に対する一定の留保の姿勢が感じられるのである。

ポクロフスキーの歴史研究はすでに言及したように、本来の革命運動史研究と並んで史学史に対する批判的分析に大きな重点がおかれていた。「貴族・ブルジョアの歴史文献」に支配的な国家の超階級性という幻想をつくりだし、その搾取者という本質をあいまいにする理論に対する痛烈な批判こそが彼の持ち味であった。プラトーフの『ボリス・ゴドゥノフ』(1920年)の書評のなかで彼は「モスクワ国家をつくりだした力は、個々の人間のエネルギーではなく、階級のエネルギーであった。我々は今それを封建的な大所有者と呼んでよいだろう」と書いたが、政治的上部構造の経済的基礎そして階級の本質を示そうとしたのである。ロシアの専制を「モノマフの帽子をかぶった商業資本」とした彼の定式は広く知られているが、これも彼の眼は専制の経済的基礎に向けられていた。だが彼の「商業資本主義論」は、すでに生前に同僚や弟子たちからも批判をうけた。これに対してポクロフスキーは、商業資本の影響がいかに大きかろうと、政治的上部構造の性格は生産関係によって規定されるのであって、交換によってではない、「商業資本は

何も生産しないし、当該社会の政治的上部構造の性格を規定しえない」と率直に自己批判したのである。

だがポクロフスキー批判はこれとは別の次元の、より現実的な歴史教育の側からの批判と関連していた。1932年8月25日付の党の決定は初等・中等教育における欠陥を指摘した。20年代はじめに学校教育において「社会科」が「歴史」に代替されたのには理由があった。旧い学校で教育されてきた「歴史」の不適格さ、新しいマルクス主義に立つ歴史教科書の未開拓、そして教師の人材不足などである。だがこうした結果、国の歴史的過去についての生徒のもつ知識がシェーマ的、断片的になっていると批判されたのである。これは「社会主義の祖国」の防衛のためには若者に対する愛国的、国際的な教育が不可欠であり、そしてそのためには祖国の英雄的歴史を例にとらなければならない。歴史にかんする具体的知識の必要はここから生まれたのであり、ポクロフスキーが先頭に立って推進してきた学校教育に対する批判がはじまったのである。更に党と政府の眼は大学をはじめとする高等教育機関における歴史教育・研究体制にも向けられた。1934年5月16日の決定によって、モスクワ大学とレニングラード大学に「歴史学部」が設置された。旧大学の「歴史・文献学部」が「社会科学部」に改組されてから約15年を経ての再建であった。

モスクワ大学歴史学部は1934年9月1日、その開設を祝った。当初は5講座(ソ連邦史、近代史、中世史、古代世界史、植民地並びに従属国の歴史)であったが、1939年までに10講座まで増えた。学部学生164人、大学院生20人であった。第一期生の一人、のちのヨーロッパ中世史家グートノヴァの思い出によると、学部長フリードリャンドは歴史学の政治的意義を強調した挨拶をしたというが、スタッフには錚々たる歴史家が顔を揃えていた。ソ連邦史のグレコフ、パフルーシン、ネーチキナ、ドルジーニン、チホミーロフそしてヨーロッパ史のコスミンスキー、スカースキン、ルーキンなどである。また1931年にモスクワ大学の人文系学部が独立して設けた「モスクワ哲学、文学、歴史学院」の歴史学部が、1941年にモスクワ大学のそれに再統合された。それに伴って、流刑から帰ってそこに在職していた「我が国のもつとも博学な歴史家の一人」、クリュチェフスキー学派の一人でもあるゴーチェも歴史学部へ復帰した。

だが、もとより歴史学部は帝政期の「歴史・文献学部」ではなかった。マルクス・レーニン主義方法論という厳しい枠内での研究・教育活動を求められたのであり、学生たちの卒業のための国家試験に祖国史、世界史と並んでマルクス・レーニン主義が含まれていた。そして教授たちの関心も社会経済史、階級闘争史、革命運動史の諸問題へと向けられた。と同時に、「粗野な一般化」をさけてまじめな深い史料研究に重きがおかれることとなった。そしてこうした観点から、忘れられた、あるいは「失寵した」旧い学派の歴史家たちの学問的遺産の再検討そして再刊が企画されたのである。すなわち1937年からクリュチェフスキーの『ロシア史講義』、プラトーフの『16-17世紀モスクワ国家における動乱史の概要』、ゴーチェの『17世紀におけるモスクワ地方』などの古典的著作が再び陽の目をみたのである。また忘れてならないのは、1929年4

月の死亡時には一片の追悼文も献げられなかったボゴスロフスキーのピョートル大帝についての伝記研究が新たに5巻本として刊行されたことである(1940-1948年)。

他方で1935年、モスクワ大学、レニングラード大学に続いてサラトフ大学に3番目の歴史学部がつけられた他、30年代後半にウラル(スヴェルドロフスク)、カザン、トムスク、ヴォロネジ、ロストフの各大学そしてソ連邦内の9つの共和国にも歴史学部をもった大学が生まれた。因みに大祖国戦争がはじまって間もなく、サラトフに疎開したレニングラード大学の歴史家たちは「土曜会」を共催して交流を深めた。サラトフ大学にはかつてリュボミーロフ、チェルノフなどプラトノフの弟子たちが働いており、元来ペテルブルグ(レニングラード)大学との縁が深かった。マヴロージン、シャピーロなど最近のレニングラード大学の指導的な歴史家もサラトフ時代に研究の基礎を固めたのである。

1936年1月26日、党中央委員会とソ連邦人民教育委員部は「ボクロフスキー学派」に対して有罪判決を下した。すなわち「有害な諸傾向並びに科学としての歴史の解体の試みは、まず第一に我が国の若干の歴史家のあいだでの、いわゆる『ボクロフスキーの歴史学派』に固有な、誤った歴史の見方の普及と関連している」と指摘されたのである。ボクロフスキーの歴史研究の欠陥や誤りについては、すでに言及したように生前から批判をうけており、彼自身もそれを認めていた。また中高等教育の改革のための彼の多面的活動の成果も歴史学部の再建にみられるように、かなり大幅な手直しを余儀なくされていた。だがボクロフスキーの業績はその死後もすぐに忘れ去られることはなかった。1932年から34年にかけて彼の本の出版は続き、そして23巻本の著作集の刊行のための委員会がつけられた。そうしたなかでボクロフスキーと彼の学派に対するネガティブな評価が下されたのである。これはもとより学問的な次元の問題ではなかった。あきらかにスターリンの個人崇拜と関連していた。スターリンは歴史家に対して、とくにレーニンと親しい多くの古い友人たちに対して敵意をもって対したからである。そしてこの覚えやすいレッテル貼りに続いたのが学問を装った、根拠のない非難であった。1936年度の歴史雑誌には「ボクロフスキーの著作におけるボリシェヴィズム史の反レーニンの概念」、「歴史科学への若干の解党主義的見解について」、「ボクロフスキーの誤った歴史見解の理論的根源」などの論文が掲載された。本節の冒頭で言及した2巻本の批判論文集も、こうした政治的状況のなかで企画されたのである。

だが批判は故人であるボクロフスキーの業績にだけ向けられたのではなかった。彼の「歴史学派」、すなわち革命後ボクロフスキーによって育てられた多くの若い歴史家たちが文字通り犠牲になったのである。これまで暗闇に残されていたこの問題について、最近精力的に調査しているアルティゾフによると、彼らのうちある者は「流刑」され、ある者は「銃殺」された。すなわち彼は50名をこえる歴史家が「反革命」を冠したさまざま容疑で逮捕されたこと—科学アカデミー歴史研究所レニングラード支部では20人の研究員のうち14人までがその犠牲になった—を明らかにするとともに、モスクワ大学歴史学部長フリードリャンド、著名なマルクス主義歴史家ピ

オントコフスキーそしてポクロフスキーの「側近」ゴーリン、など 1937 年から翌年はじめにかけて「銃殺」された 14 人について詳しく調査した。だが何故、いかなる具体的な原因で、ある者が「銃殺」され、他のものがそれを免れたかは、結局のところ不明であるという恐ろしい、だが当然の結論を引きだしている。決定的な理由はもとより、いかなる原因もなかった。ポクロフスキー学派の若い歴史家たちの「大テロル」もまた、当時の政治状況のなかでしか理解しえないのである。

III 「ブルジョア史学」と「マルクス主義史学」の狭間で

第 I、第 II 章では、幾つかの顕著な現象を例にとりながら「革命」後の歴史学と歴史家がおかれた厳しい状況を概観してきた。もとより、すべての歴史家が同じ状況におかれた訳ではなく、また同じ状況にあっても個人差は小さくなかった。以下では「革命」前に歴史家としての訓練を受けた三人の若い歴史家ドルジーニン、アンドレーエフ、ノヴォセリスキーの「革命」後の歩みをたどることによって、同じ問題を別の角度からより具体的に検討することにしよう。その際、行論の都合で部分的には 1940 年代から 50 年代はじめの動向にも言及されるだろう。

① ドルジーニン

ニコライ・ミハイロヴィチ・ドルジーニンは 1886 年 1 月、ロシア南西部のクールスクに生まれた。10 歳の時に家族とともにモスクワへ移住した。すでにギウナジウム時代に歴史への関心が生まれ、また社会主義の文献を読んだ。とくにレーニンの『ゼムストヴォの迫害者とりペラリズムのハンニバル』、『何をなすべきか』を読み、その論拠の深さと叙述の論理性、そして近い将来における革命の不可避という結論にひかれた、と書いているが、他方でトレチャコフ美術館に足を運び、ペロフ、スリコフ、レーピンなどの民衆生活を描いた絵画を「特別な関心をもって」みた。このリアリズム芸術への愛着は彼のなかでのちのちまで保たれたが、レーピンの著名な『クールスク県の十字行』(1880-83 年)のなかに幼年期の体験と重なるものがあった、とも推測されるのである。

1904 年秋、ドルジーニンはモスクワ大学歴史・文献学部に入學した。だが翌年 1 月の「血の日曜日」を契機とする革命はモスクワの学生たちをも巻きこんだ。その積極的な参加者であった彼は 2 月に逮捕されて、退学処分をうけ、そしてサラトフへ追放された。だがマルクス主義文献の習得と地下活動という日課に変わりはなかった。そして 1906 年秋、こんどはモスクワ大学の法学部経済学科へ再入學した。歴史の勉強に入る前に、経済学の基礎を学んでおかなければならない、と考えたからである。そうした経過ののち、1911 年秋、再び歴史・文献学部に入って、ただちに 19 世紀ロシア史の研究に入ったのである。彼は 19 世紀の革命運動史、農民史に強い関心を抱いていたが、講座の教授ボゴスロフスキーは講義では「18 世紀後半と 19 世紀前半のロ

シア史」を、プロ・ゼミで「ルースカヤ・プラウダ」を取りあげた。彼の講義もゼミナールもドルジーニンに学問の厳しさを深く味わせるものだった。ボゴスロフスキーは1912/13年度のゼミではアレクサンドル I 世の時代を、翌年の1913/14年度にはニラコイ I 世の時代を取りあげた。ドルジーニンはここでデカプリスト、ニキータ・ムラビョフそしてキセリョフの改革について報告した。こうしてドルジーニンは三年間にわたってボゴスロフスキーの指導を受けたのである。この体験はドルジーニンにとって貴重なものであった。「学問への誠実な、そして献身的な奉仕者」であった師にとって重要なことは、彼が自分の知識と研究方法を伝えた人々の「学問的な能力と学問上の成功」であった。ドルジーニンはもとより師のこうした真摯な態度に深く感動した。彼はボゴスロフスキーの学位論文『ピョートル大帝の地方改革』を文字通り一生懸命に学び、そして同じ観点から「キセリョフの改革」に取り組むことを秘かに決意したのである。

1916年春、ドルジーニンは軍役のために大学での仕事を中断したが、翌年2月には、再び革命が勃発した。彼は赴任先のマリウポリで結成された革命組織の副議長として革命に参加した。1918年、除隊した彼は国家試験に合格し、歴史・文献学部を修了した。ボゴスロフスキーは彼に大学に残って「教授資格」の取得をすすめたが、同時に「学問の道の選択は剃髪に等しい」とも述べた。外的な多くの喜びや満足を拒否しなければならないというのである。ドルジーニンの本格的な研究生生活はこうして始まった。彼はボゴスロフスキーの「助手」として、はじめて古文書に接した。また再び「動員」された時には、師はコストロマー国立大学でロシア史の講義とゼミナールを担当するよう特別の許可を手に入れてくれた。「私は毎月、特別の教授用の車で、古都コストロマーへ出かけた」。そしてラニオン歴史研究所が発足した時、彼はボゴスロフスキーの推薦で「第二種研究員」となった。師ボゴスロフスキーは彼と会うたびに暖かい言葉をかけ、そして激励したのである。

ドルジーニンの最初の本格的な論文はラニオン歴史研究所の『紀要』の第1、2号(1926-27年)に分載された「1856-60年の『土地所有者雑誌』」であった。これは農奴解放の問題と来るべき改革の性格と内容をめぐってたたかわされた領主間の論争を分析したものであった。彼の分析によると、この雑誌にはさまざまな観点が述べられているが、圧倒的なのは「リベラル・マンチェスター派のドクトリン」から出たものであり、そこでは領主・企業家に労働力市場を確保するために農民分与地を縮小するべきだ、と領主の利益を志向していた。この論文はすでに1923年に完成しており、ドルジーニンは次の学位論文のテーマであるデカプリスト研究に入っていた。ところが、発表から2年以上たった1929年3月17日付の新聞『プラウダ』にボクロフスキーは「歴史家の学術研究について」という論文を発表して、当時まだ非党員だった3人の歴史家の研究をきびしく批判した。ラニオンの解体をすすめていた彼は、ついにそこでの研究成果に対しても「襲いかかった」のである。その3人とはヴェセロフスキー、プレオブラジェンスキー、そしてドルジーニンであった。ボクロフスキーはドルジーニン論文を詳しく検討し、この「若き歴史家」を批判した。批判点は領主のプログラムに対する超階級的な観点、そして彼らの

階級的要求に対する「共感的な性格づけ」、という点にあった。ドルジーニンはこれに納得しなかった。「私の論文では」と彼は後に書いた、「農民分与地の削減に利益を有する領主たちの立場の階級的性格を跡づけたのであり、どこにもこのプログラムへの共感表現は表現されなかった」。ドルジーニンは、ただちに『プラウダ』編集部には、ポクロフスキーに宛てて「穏やかな調子で」回答を書いた。だがこれは握りつぶされてしまった。

この事件の2カ月後、1929年5月、ドルジーニンの学位論文『デカプリスト、ニキータ・ムラビョフ』の公開審査がおこなわれた。すでに言及したように、このテーマは1912/13年度のゼミナールで報告して以来関心を抱き、そしてデカプリスト百年を迎えた1925年前後から本格的に取り組んだテーマであった。反論者たちは、ポクロフスキーの方法論に立って論文を批判した。引き出された結論の社会経済的基礎づけが不十分であること、個人の具体的性格づけに「心理主義」への傾向がみられること、ムラビョフの憲法については「イデーの派生」理論への愛着があること、などである。論争は数時間にわたって続き、会場を埋めた人々も賛否半々であった。最後に司会のネフスキーによって、学位論文は「マルクス主義的ではないが、受理された」と宣言された。ドルジーニンは、こうしてラニオン歴史研究所の閉鎖の直前に学位をうけて研究生生活の継続を許された。学位論文は1933年に手直しのうえ刊行されたのである。

学位論文が受理された後、ドルジーニンはモスクワ大学の歴史・哲学部や民族学部博物館学の講座で教師として働いたのち、1934年秋、再建された歴史学部の教授へ迎えられた。だが、この間「非黨員」であった彼と彼の同僚は苦しい体験を味わうことになる。ドルジーニンは『思い出』のなかで次のように記している。

30年代はじめ、非黨員歴史家たちが獲得した知識や熟練の実現には多くの障害があった。共産主義アカデミーの新しい歴史研究所は圧倒的に赤色教授学院を修了した共産主義者たちによって補充された。また高等教育機関の歴史系諸学部での教育も、彼らの手に集中された。中等教育での歴史教育は事実上ミニマムに帰され、抽象的・シェーマ的性格をおびた。ラニオン〔歴史研究所〕の若干の研究員、そして研究計画を遂行していた大学院生は技術史へ、他のものは統計の仕事へ切り替わることを余儀なくされ、そして第三のものはまったくモスクワを後にしなければならなかった。

ドルジーニンが最後の行で間接的に示唆したのは、言うまでもなくプラトーフ事件のことであろう。すでに言及したようにこの捏造された「事件」にリュバフスキー、ゴーチエといった大家からチェレプニンのような若い大学院生まで多くの歴史家が「モスクワを後にしなければならなかった」。ドルジーニン自身は自分の運命について何も記していないが、最近公けにされたクーシェヴァの思い出によると、彼もまた一時的に拘留されたのである。

モスクワ大学歴史学部の教授に就任した時、彼はすでに48歳になっていたが、その後20年

程の勤務のあいだ彼が没頭したテーマは19世紀前半の国有地農民の歴史であった。この問題への関心もまた学生時代のボゴスロフスキー教授のゼミナールにまで淵源するが、ドルジーニンは1934-37年のあいだ、冬と夏の休暇を使ってレニングラードへ出かけて史料を蒐集した。彼によると、国有地農民の状態を研究することなくしては、全体として農民の歴史を解明すること、そしてロシアにおける封建制から資本主義への転換期における農村の社会・経済的発展の全過程を解きあかすことは困難である。彼はこうした観点から、国家権力と封建的従属農民とのあいだの相互関係、国有地農村と私的な領主の村の状態における共通性と相違、1837-41年の国有地農民の改革(キセリョフの改革)と1861年との関連、こうした一連の重要な問題の解明にのりだしたのである。この研究は1940年の『歴史学紀要』第7巻にその一部が発表されたが、4年後に博士学位論文『国有地農民とベ・デ・キセリョフの改革』として提出された。この度はまったく問題なく受理されたのである。

ドルジーニンの学位論文は戦後の1946年に刊行された。第1巻だけで636頁の大冊である(第2巻は1958年)。この研究については我が国でも言及があるが、彼によってはじめて国有地農民(農村人口の約4割を占める)が分析対象として取り上げられた。このなかで、1830-40年代の農民問題にかんする秘密委員会の活動が全面的に解明され、国有地の村と私領主の村の改革に対する政府官僚の陣営におけるさまざまな対立・矛盾が析出され、あるいは農民すべてのカテゴリーの状態の変更について政府の最初の計画案の存在が指摘された。こうして1861年の改革前夜における状況が豊富な史料的裏付けをもって展開されたのである。ドルジーニンの本書は「マルクス主義史学の偉業」として、1947年度の「ソ連邦国家賞」(いわゆるスターリン賞)を受賞した。かれは受取った報奨金をモスクワ州のある「孤児院」に寄付した。そこには「大祖国戦争」で両親を失った大勢の子供たちが養育されていたからである。

ところでドルジーニンは、1936年の共産主義アカデミーの閉鎖にともなって開催された科学アカデミー歴史研究所の上級研究員に迎えられた(1938年秋)。そこでは企画された数巻本の『ソ連邦史概要』の全体の責任者そして19世紀にかんする巻の編集と執筆に加わった。もう一つは、歴史学部の学生のための教科書の執筆であり、ネーチキナとの共同作業で1940年に刊行された。これは1959年まで基本的参考書として広く流布したものである。こうして、かつて「マルクス主義的でない」、と批判されたドルジーニンは、いまやソ連史学の主要な担い手として、とくに第二次大戦後のソ連史学を代表する歴史家となったのである。

だが「ブルジョア史学」のなかで育ったドルジーニンは、その担い手たち、とくに師のボゴスロフスキーとその学問に対して深い敬意を持ちつづけたことに改めて注目しておこう。ドルジーニンは1986年8月に亡くなったが、死後刊行された著作集(全4巻)には幾つかの未発表のものが収録されている。その一つに「ボゴスロフスキーの思い出」がある。これは1949年4月20日の師の没後20年を記念して、未亡人宛ての手紙という形式で書かれたものだが、当時は発表されることはなかった。「思い出」は今では亡き師に対する深い敬意にみちた文章である。例えば

次のような一節がある。

…学位論文「デカブリスト、ニキータ・ムラビョフ」を完成した時、私はこの著作の一冊をミハイル・ミハイロヴィチに手渡しました。しかし彼はすでに協会での私の報告を聞くことができませんでしたし、私の仕事についてご自分の意見を述べることもできませんでした。彼は臨終の床にあり、私の論文の公開審査の1カ月前に亡くなりました。彼の棺を見送りながら、私は自分の記憶のなかにある私たちのすべての出会い、私には貴重な私たちの交際の時間を想いおこしました。そして偉大な学者にして洗練され、才能豊かな教育者としての彼が私に与えたすべてのものに対して心中ひそかに感謝しました。私はこの感謝の気持ちを周囲の人々に隠しませんでした。ポクロフスキーはこれを赦さなかったのです。…

ドルジーニンには彼に対するポクロフスキーの非難が学問的というよりも、旧師に対する敬意に向けられていた、といたいたいのである。ポクロフスキーは「ブルジョア史家」のあいだでは「ブヨ」と呼ばれ、嫌われていたことも知られている。だが、ここで注意したいのはその先である。師の死去(1929年4月)につづいて、ポクロフスキーも3年後に亡くなった(1932年4月)。そして再建されたモスクワ大学歴史学部の教授となったドルジーニンは「ミハイル・ミハイロヴィチの方法論の授業を忘れませんでした」と書いているのである。彼にとってボゴスロフスキーの講義とゼミナールは文字通り「生ける手本」であった。したがって帝政期の歴史教育と研究の伝統がドルジーニンを通して「ソ連史学」の若い歴史家にも伝えられたのであり、それは誤解をおそれずにいうならば「階級闘争の教義」よりもより深いところで「ソ連史学」を規定したのである。

② アンドレーエフ

アレクサンドル・イグナチエヴィチ・アンドレーエフは1887年3月、ペテルブルグの労働者の家庭に生まれた。父は警備員、母は洗たく女として生計の糧をえており、貧しい階層に属した。サーシャ少年も養護施設へあずけられたのである。だが勉強が好きで大変良くできたこの少年は、まず奨学金をもらって「ペトロフスク商業学校」へ入学した。更に教育をつづけるために、商人団体の奨学金を受けることになった。彼の希望は「歴史家」であった。だが商業学校では大学への入学資格を得られなかったので、とりあえず「ペテルブルグ工芸学院」の経済学科に進むと同時にギリシア語、ラテン語の独学をはじめ資格試験に備えた。結果は〈優秀〉であった。こうして1909年秋、22歳のアンドレーエフは晴れてペテルブルグ大学歴史・文献学部に入學したのである。

アンドレーエフは、入学後も多くの時間を自分と家族のために生計の糧を手に入れるために費さなければならなかったが、二人の教師に恵まれた。一人はラッポ＝ダニレフスキー、もう一人はプレスニャーコフである。彼らの指導の下でロシア中世史、とりわけ16世紀ロシアの北部地

方の研究に入ったのであり、1916年に出版された『ラッポ＝ダニレフスキー献呈論集』にアンドレーエフは最初の論文を発表することができた。だが、この年大学を修了した彼は大学に「残留」することはなく、師の推薦で文書館勤務の道を選んだ。1921年からは、ロシア科学アカデミーの歴史常設委員会のメンバーに加えられた。この間、多くの時間は史料集の刊行という地味な仕事にさかれた。彼の手によって『経済参議会文書集成』の第1巻が1922年に、第2巻が1929年に刊行された。（この史料集の価値については、アンドレーエフと同世代であり、また同じ古文書学の道を歩んだヴァルクの詳しい紹介がある。1991年にでた彼の遺稿集に収められている。）アンドレーエフは、こうして古文書専門家としてその名を知られるようになったのである。

アンドレーエフの最初にして唯一の著書は『シベリア史科学概要』（第一部、17世紀）であり、1940年に出版された。彼の死（1959年）の直後にほとんど2倍に増補されて刊行されたその再版に序文を寄せたヤツンスキーは、「1931年秋から1935年春にかけて、ア・イ・アンドレーエフはクラスノヤルスク地方の各種の組織で働いた…」と書き、彼の主著がシベリアのクラスノヤルスク時代の産物であったことを示唆している。この指摘はもちろん誤りではない。だが肝腎の事実は伏せられた。アンドレーエフが住み慣れたペテルブルグ（当時はレニングラード）を離れてシベリアに移住したのは、彼の自発的な意志ではなかった。流刑されたのである。

1929年11月24日、当時考古学委員会の研究員の地位にあったアンドレーエフは突如、レニングラード地区の「合同国家政治保安部」に逮捕された。第II章で言及した「プラトーフ事件」の逮捕者の第1号がアンドレーエフであったのである。1931年はじめの判決で彼は『自由ロシア再興のための闘争の全国民同盟』なる架空の組織の創出者そして実践活動における指導的役割を演じたメンバーの1人として5年間のシベリア流刑が決定された。アンドレーエフは1931年8月末にエニセイスクに到着した。その時から1935年4月の刑期終了まで、彼は「各種の組織で働」かねばならなかった。シベリア開拓の最前線ではあったが、会計係、簿記係、労働経済部主任、行政秘書として室内での事務がおもな作業であった。「タイガでの労働は、私に多くの興味深い発見をもたらした」としたように、流刑生活のさまざまな不如意を嘆くよりも、彼にはシベリアの持つ魅力の方がまさったのである。そしてこれはエニセイ博物館勤務のあいだ（1933-1935年）に開花した。

…1933年春、私はエニセイスクへ戻り、この年の8月からシベリアの最も古く、そして十分に豊かな博物館の一つであるエニセイスク博物館で研究員として働きはじめた。当面の仕事は、とくに学校の〔博物館〕見学に関連したものであったが、町にあるシベリアの地理学、民俗学そして歴史にかんする十分に多くの文献を読むことを私に強いた。……

アンドレーエフは、こうして『ストロガノフ年代記』、レメゾフの著述、各種の地図などのシベ

ロシア史の基礎史料を徹底的に調査するとともに、新たに多くの史料を発見した。古文書専門家としての彼の本領がここで示されたのである。この仕事は流刑期間が終ってからでも、そして生涯にわたって続けられた。すでに言及したように、この研究は1940年にまとめられ、学位論文として提出された。反論者は碩学ゴーチエ、シベリア史に最も通じた歴史家バフルーシン、そしてグレコフであったが、論文は高く評価されて受理された。シベリア学者アンドレーエフはこうして流刑のなかから誕生したのである。

流刑からレニングラードへ戻ったアンドレーエフは北方諸民族研究所に招かれ、コラ半島、カレリア地方、そしてシベリアなどに住む諸民族の研究、という当時まだ未開拓の分野の調査・研究に従事した。ライサ・ミュルレル女史は改組された考古学委員会の最初の大学院生であり、また彼の数少ない弟子の一人であったが、アンドレーエフとの共同作業から一人前の研究者に育っていった。また彼は1938年に全ソ地理学会のメンバーとなり、そこでも研究報告を行なった。だが1941年の戦争の開始はまたしてもアンドレーエフの運命を大きく変えた。レニングラードの自宅は爆撃をうけたため彼は1942年6月、タターリアへ、そして更にタシケントへと疎開した。そしてここでモスクワ国立歴史・古文書学院から前線にいったウスチュゴフの後任として「歴史補助学」の主任に招かれたのである。

モスクワ歴史・古文書学院は1929年11月に「古文書学院」として設立が決定され、翌年開校した、文字通り古文書を扱う専門家養成機関であった。1933年に最初の卒業生12人を出して以来、年を追うごとに組織は拡充され、スタッフも補強された。その後9年間(1933-1941年)で400名をこえる若き専門家を養成するとともに、大学院の課程も設けられて学術研究員への道も拓かれたのである。この学院に「歴史補助学」の講座が開設されたのは1937年であり、以来ソ連では唯一のこの種の専門講座としてユニークな存在であった。アンドレーエフは、ここで6年間にわたってその講座を指導したのである。

アンドレーエフは第一に、歴史補助学についてそれまで継続されていた教科書の出版に努めた。チェレープニン、チャーエフの共著『ロシア古文書学』(1946年)をはじめ、史料学、公文書学、歴史地理学などの教科は、いうまでもなく歴史研究の前提となる必須のものであると認識されたからである。またアンドレーエフは、ここで師であるラッポ＝ダニレフスキーの『歴史方法論』の第1巻を学ぶよう提案した。この著作は、アンドレーエフが大学院生に対して行った「理論的史料学」で広く利用された。学院では革命前の教育実践が広く行なわれており、それを通して「ブルジョア史家」の方法が享受されていたから、アンドレーエフの提案と実践も特別なことではなかった。当時、それはボクロフスキーや彼の学派の著作と較べるならば、「より少ない悪」として許容されていたからである。アンドレーエフは、この他にも学生に外国語文献の習得の必要性を説き、これを熱心に薦めたのである。

アンドレーエフにはもう一つの重要な仕事があった。彼は疎開先からモスクワに戻った旧知のグレコフに対して、「革命」によって中断されている史料集『ピョートル大帝の手紙と書類』の再

刊を提案した。1887年にアカデミー会員ブイチコフの手によって第1巻が刊行されたこの膨大な史料集は、彼の死後は息子のイヴァン・ブイチコフへと引き継がれたが、1918年に第7巻第1分冊が出て以来、四半世紀も出版されていなかったからである。グレコフはこれに同意し、1943年に特別委員会がつくられた。委員長は碩学ゴーチエであったが、程なく亡くなり、その後任にアンドレーエフが選ばれたのである。彼はこうして再び史料編纂の仕事についた。1946年には、第7巻第2分冊が刊行されたのである。(因みに1992年に第13巻第1分冊がでたが、まだ1713年までであり、その完成は21世紀に入ることは確実である)。

アンドレーエフは、こうして重要史料の編纂責任者となるとともに、ピョートル時代史研究グループの責任者としてその研究の先頭に立つことになった。1947年に刊行された論文集『ピョートル大帝』はその成果であり、全体で10本の論文のうちアンドレーエフは自ら3本を寄せた。「1698年のイギリスのピョートル大帝」、「ペテルブルグの科学アカデミーの定礎」、そして「イヴァン・アフアナシェヴィチ・ブイチコフの思い出」である。最後の「思い出」はすでに言及した『ピョートル大帝の手紙と書類』の二代目編纂者(1944年没)の功績をたたえたものであった。だが1948年1月に開かれた本書の合評会でこの論文集、というよりもアンドレーエフ論文は厳しい批判を蒙った。とくに「1698年のイギリスのピョートル大帝」は、『歴史の諸問題』誌上でピョートル1世を「西ヨーロッパ、とくにイギリスのモデルを盲目的にコピーする、イギリス人の熱烈なる弟子にして模倣者」として示した、とあって非難されたのである。アンドレーエフはピョートル大帝時代の研究グループの指導者の辞任、そして科学アカデミー考古学委員会の幹部研究員の辞任を申しでた。辞任は受理された。だが非難の動きはおさまらず、『ピョートル大帝』をこえて、アンドレーエフの勤務先にまで向けられた。1948年10月、アンドレーエフ非難のキャンペーンは頂点をむかえた。「とくに大きな危惧をいだかせるのは、ア・イ・アンドレーエフ教授の指導する歴史補助学講座である。講座だけでなく、まず第一にアンドレーエフ教授である。彼は深い政治的誤りをおかした。彼によって欠陥のある書物が出され、論文が書かれたが、それらの中にアンドレーエフは我々には無縁な観念論的世界観をもち込み、ブルジョア科学の前に追従を示し、その学術並びに教育活動において自己をラッポ=ダニレフスキーの反動的なブルジョア学説の継承者として示した」。アンドレーエフは、こうしたイデオロギー批判にたじろぐことはなかった。彼は自分の講座と同僚のなかには、実際に「ブルジョア科学を前にして克服されない深い敬意」があることを率直に認めた。そしてその原因を、歴史補助学という学問が西欧で生まれたことに求めた。だが師ラッポ=ダニレフスキーの彼への影響については毅然たる態度を示した。自分の誤りは努力して訂正するけれども、ラッポ=ダニレフスキーへの『個人的な信頼』まで断つのは困難である、けだし「彼は私の先生だったからだ」と。

1948年10月の会議は、当時、東西冷戦の開始によって国内に吹きあれた「ブルジョアのコモボリタニズム」根絶キャンペーンの反映として理解される。アンドレーエフには「反愛国主義者」の役割が振りあてられたのである。この会議ののちも、なおしばらくアンドレーエフは講座

にとどまったが、彼の部屋を訪れるものは稀であった。若干のものは“失寵した”彼と挨拶を交わすのさえ止めたという。1949年4月26日、かつて彼とともに講座を担ったチェレブニンが「ラッポ＝ダニレフスキー」について報告したが、アンドレーエフは欠席した。彼に対して非難が向けられ、そしてその日、彼は学院から解任された。6月、アンドレーエフはモスクワを去り、レニングラードへ帰ったのである。

③ ノヴォセリスキー

17世紀ロシア史の研究に大きな足跡を残したアレクセイ・アンドレーヴィチ・ノヴォセリスキーもまた「旧いブルジョア史学」のなかで育った歴史家の一人である。寡黙で、また自己を語ることもほとんどなかったが、1994年に出された遺稿集の中に自筆のごく簡単な次のような「自伝」が公表されている。

1891年にタムボフの町に生まれた。教師の息子である。1915年にモスクワ大学歴史・文献学部を金メダルをもらって修了した。教授職の準備のためにロシア史講座に残留し、1915-1918年のあいだにロシア史、一般史、及び政治経済学にかんして課されていた修士試験のすべてに合格した。1919年に試験講義をやり、モスクワ大学の教員の構成に加わった。…

事実だけを年代順に並べた履歴書にすぎないが、大学修了のさい金メダルの対象となった作品が『ロシアにおける最高枢密会議』という、ピョートル死後の政治機構を扱ったものであることが注にある。そして1919年に28歳のノヴォセリスキーが行った「試験講義」については、これもまた最近げけになった碩学ゴーチエの日記に記録されている。彼は2月12日(旧暦)の日記に次のように書いた。

…夕方、私はア・ア・ノヴォセリスキーの試験講義を聞いた。素晴らしい頭脳だ。『動乱後の貴族の土地所有』というテーマでのすぐれた講義だ。彼は我々の後継ぎとして送りだそうとしている若い歴史家の最初の一人だ。この人物はクリュチェフスキー学派の良き継承者になるだろう。

ノヴォセリスキーはクリュチェフスキー学派の伝統のなかで育てられ、そしてその将来を嘱望された若い歴史家であった。だが試験講義のその年、彼が育った歴史・文献学部は解体されたことに象徴されるように、その後の経過は、元来寡黙な彼の口をさらに重くしたのである。

1922年1月、ラニオン歴史研究所が開設された時、ノヴォセリスキーは「第一種研究員」として加わり、ここが当分の間彼の職場となった。研究所で研究報告を2度行ない、そして最初の論文「17世紀後半のモスクワ国家における農民とホロープの逃亡並びに彼らの搜索」は研究所

の『紀要』第1号(1926)に発表された。この論文をはじめとして、彼はその後一貫して17世紀の社会経済史を対象とし、頑なまでに生涯その分野を広げることはしなかった。1926年に研究所の「第二種研究員」(大学院生)となったチュレプニンの思い出によると、彼ら2人はモスクワ大学教授、ヤコヴレフの弟子であった。「愛弟子」ノヴォセリスキーは「自己の教師のもとで、社会・経済的テーマへの関心を育んだのだと思う」。この推測は、例えば1925年に2人の名前で少部数、リトグラフ出版でされた史料集『17世紀モスクワ国家の農民とホロープの歴史記念碑』からも裏付けられる。二人は20年代はじめからこの問題に取り組んでおり、師ヤコヴレフの研究は1943年に大著『17世紀モスクワ国家のホロープ制度とホロープ』として上梓された。弟子のノヴォセリスキーは農民史の方へ考察を限定したのである。

ノヴォセリスキーは1929年、最初の著書である『17世紀の世襲領主とその経営』を刊行した。「国立中央古文書館」に所蔵されている17世紀の中規模の領主ベゾブラゾフの経営文書の精緻な分析、すなわち彼のキャリア、所領構造とその変化、行政組織、直営地経営の実態、そして農民とホロープの法的、社会経済の状態などの徹底的な分析を試みたものである。この結果、ベゾブラゾフのような中領主が自己の経営から最大限の収益を引きだそうとして、一方では農民労働の搾取強化に、他方では経営の合理化、すなわちあまり肥沃でない北部の所領を手放して、より大きな利益のみこまれる南部に世襲領を獲得しようとしたことが具体的にあきらかにされた。言い換えると、19世紀の資料ではすでによく知られていた非黒土(地代はオブローク)と黒土(地代はパールシチナ)への地帯分化が17世紀にもあったことが、確かな裏付けをもって示されたのである。この他にも、ベゾブラゾフの経営が市場と密接に結びついていたこと、したがって自給的ではなく、利益をあげるために市場を利用したこと、など17世紀の農業問題について、個別経営に基いたこれまでにない深い内容をもった研究であったのである。

ノヴォセリスキーの著書は、チュレプニンの思い出によると、ヤコヴレフをはじめ、ボゴスロフスキー、ヴェセロフスキー、ゴーチエなどの賞賛をうけたという。だが現在私たちが読むことのできる書評は雑誌『マルクス主義歴史家』13号に載ったものだけである。そこで書評子は、全体を概観した後で次のように指摘した。「ノヴォセリスキーの著書は、その事実資料によって確かに歴史家に寄与している。[だが]それはイデオロギー的志向において反マルクス主義的である」と。こうした評価は、当時まじめなアカデミックな著作に対する評価として典型的であった、という。ラニオン歴史研究所の研究員たちはドルジーニンのように、学位論文の提出をめざして研究していたから、ノヴォセリスキーにもその意向のあったことは当然だろう。だが研究所はその年に閉鎖された。そして新設の共産主義アカデミー歴史研究所へ移ることもなかった。彼はレーニン図書館の学術・文献目録部門の主任、という「仕事のない状態におかれた」のである。もちろんノヴォセリスキーはまだ幸いであった。彼の師ヤコヴレフをはじめ、多くの同僚は「流刑」を余儀なくされたからである。若い大学院生チュレプニンは「マルクス主義方法論の未取得」を理由に研究所を除籍されただけでなく、3年間(1931-1933年)北部のホルモゴールイ地方の採

石場で強制労働に従事したのである。

ところで「イデオロギー的志向において反マルクス主義的である」と評された著作の主ノヴォセリスキーは定着しつつあった「マルクス主義史学」をどのように見ていたのだろうか。彼の著作や論文にはマルクス、エンゲルス、そしてレーニンなど「古典学者」の引用はまったくなく一戦後の入党(1951年)の頃まで一、また彼自身そうした論文を書くこともなかった。したがって手がかりはここでもチェレブニンの「思い出」だけである。チェレブニンによると、歴史研究所などで催された論争はノヴォセリスキーの世界観、歴史観に作用を及ぼさざるをえなかったし、理論的問題にもまじめに関わった。だが彼は、「具体的な歴史現実の深い客観的研究」を通して、その研究を理論によって装備したのであった。こう指摘して、更に次のように述べている。

…20年代には歴史過程のマルクス主義概念はエム・エヌ・ボクロフスキーの体系と全体として同一視された。アレクセイ・アンドレーヴィチが個人的にボクロフスキーをどれだけ身近かに知っていたかどうかは私には言えないが、彼は後者〔ボクロフスキー〕の著作中の多くのことを批判的に受け取った。その代わりに、アレクセイ・アンドレーヴィチはボクロフスキーの概念が「反マルクス主義的」とみなされた時、その「暴露」にも加わらなかった。これら全てはノヴォセリスキーの学問上の大きな誠実さと原則性について語るものである。

1938年、ノヴォセリスキーはほぼ10年ぶりに論文を発表した。『歴史学紀要』に載った「17世紀ロシア国家の南部諸郡における農奴制的土地所有の普及」であり、1929年の著書の延長線上にある幾つかの問題を考察したものである。そしてこの年、ノヴォセリスキーはモスクワ大学歴史学部から、論文審査なしで歴史学博士候補生の学位を授与された。こうした措置はそもそも学位論文を書かなかった「赤色教授学院」の卒業生に対しても採られており、特別ということではなかった。この他、ノヴォセリスキーは、師のヤコヴレフの下で、17世紀の大貴族モロゾフの経営史料の編纂にあたった。これはその後2分冊で刊行された(1940-1945年)。他方で、勤務の方はレーニン図書館を経て、モスクワ大学人類学博物館主任研究員(1935-1942年)へ移った。そして1942年末、チェレブニンとともに科学アカデミー歴史研究所へ入所した。だが研究所のスタッフになったのではなく、その博士課程に入ったのである。こうして50歳の学生(ドクトラント)が誕生したのである。だが翌43年からはモスクワ国立歴史・古文書学院の「歴史補助学」講座(主任はアンドレーエフ)の専任講師となった。史科学への彼の関心を育てるうえで学院は大きな役割を果たしたのである。

1946年6月17日、科学アカデミー歴史研究所の会議室でノヴォセリスキーの学位(博士)論文『17世紀前半のモスクワ国家とタタールとの闘争』が審議された。三人の反論者と列席したすべてのものが、学位請求者が繰りひろげた命題が堅固な史料的基礎のうえに構築されていること

を認めた。反論者の一人ピョータは「無条件に我が歴史文献において…その引用史料の広汎さ、その素晴らしい処理、結論の確かさと有意義さにおいて偉大なる現象である」と評価した。こうして10年以上に及ぶノヴォセリスキーの怠むことなき研究活動は実を結んだのである。

本書の中心的問題は、「タタールのくびき」以後も、たえずロシアの地へ侵入し、町や村を焼き払い、財産を略奪し、家畜を追いたて、そして人々を捕虜にとったクリミア・タタール、この遊牧民とのたたかいについて、一方でタタールの軍事的積極性の原因、他方でロシアの南部植民問題を視野に収めながら解明しようとしたものである。前者についていえば、クリミア・タタールによる近隣へのたえ間なき侵略そして彼らからの贈物の強要という行為は、つまるところ低い生産力とその発展の緩慢さにあった、と指摘される。食糧自給できない彼らは、そこからの出口を生産力の発展ではなく、侵略に求めた。そしてこうしたクリミア領主層の政策は「クリミアには害悪となった。古来の社会形態を保持し、その経済発展を緩慢にし、そして国家権力を弱めるからである」。ノヴォセリスキーはクリミア・タタールの矛盾をこのように説明している。

ロシア南部の植民問題は、彼の以前の研究の延長線上にあった。17世紀半ばに設定されたベルゴロド防衛線は国の安全を著しくたかめ、そしてその北側にある肥沃な黒土地帯への大量の入植を促した。黒土に農業が導入され、17世紀末にはこの地方は大量の商品穀物の生産地となるのである。かくて南部植民はタタールの侵略から国の中央部を守り、そして地方の生産力の発展を助けた、と意義づけられたのである。この他にもリヴォニア戦争、17世紀はじめの外国軍の侵略、そしてスモレンスク戦争時におけるクリミア・タタールの侵略・妨害の行為が各々詳しく分析されたのである。

600頁に及ぶノヴォセリスキーの著書は1948年に出版された。チェレプニンは「真の学者はいつも控え目なものだ」として次のようなエピソードを紹介している。大祖国戦争後、ポリジャヤ・ピロゴフスカヤ通りの古文書館で出会った時、彼は「内気な笑顔でもって」、『モスクワ防衛』の勲章(メダル)を受賞したことを、「私には唯一のものとなるだろう」と、恥しげに知らせてくれた。だが彼は間違った、とチェレプニンは言う。「その後彼は他のメダルも、そして政府の最高の賞—レーニン賞を手にしたのだから」と。

ノヴォセリスキーは、師のヤコヴレフについても何ひとつ文章を残していない。クリュチェフスキー学派の一人であり、しかもリャザンの同郷人であったヤコヴレフは、「プラトーフ事件」にさいしてはサランスクへ流刑された。そして先述のホロープ研究に対しては厳しい批判が寄せられたのみならず、クリュチェフスキー没後35年に寄せて書いた論文(1946年)—筆者は未見だが、ここでヤコヴレフは「クリュチェフスキーへ帰る」ことを強く主張したという—も容赦のない非難をあびた。こうした事情も恐らくは左右したのであろう、ヤコヴレフが亡くなった時(1951年)、どこにも追悼文は発表されなかった。ノヴォセリスキーはそれまでも、そしてその後もこの種の文章を書くことはなかったが、この場合も同じであった。だがチェレプニンによると、この時彼は科学アカデミー—歴史研究所の封建制史部門の会議で、自分の先生に献げられた

「甚だ心のこもったスピーチ」をしたという。

ノヴォセリスキーはその後、その死(1967年)までウスチュゴフと共に『ソ連邦史概要・17世紀』(1955年)を編集した他に幾つかの論文を発表しているが、とりわけ史料刊行が仕事の中心を占めていた。「生まれながらの史料学者」である彼の活動は生涯にわたってアルヒーフと関係していた。ソ連史学の大きな成果が示された第十回国際歴史家会議(ローマ、1955年)に参加した時、チェレプニンが「ロシアにおける封建制の基本的段階」、ドルジーニンが「ロシアにおける資本主義の起源」という論争問題を報告したのに対して、ノヴォセリスキーはシュンコフと共に「ソ連邦における歴史史料の刊行」について報告したのである。

(どひ つねゆき 一橋大学社会学部教授)

※ 主要な教育研究機関等の正式名称

Археологическая комиссия (考古学委員会)

Гуманитарные вузы (人文系高等教育機関)

Институт истории Академии Наук (科学アカデミー歴史研究所)

Институт истории Компартии (共産主義アカデミー歴史研究所)

Институт истории российской ассоциации научно-исследовательских институтов
общественных наук. (ラニオン歴史研究所)

Институт красной профессуры (赤色教授学院)

Историко-филологический факультет (歴史・文献学部)

Исторический факультет (歴史学部)

Коммунистический университет им. Я. М. Свердлова (スヴェルドロフ大学)

Коммунистический университет трудящихся Востока (「クートベ」)

Московский государственный историко-архивный институт (モスクワ国立歴史・古文書
学院)

Московский институт философии, литературы и истории (モスクワ哲学, 文学, 歴史学院)

Общество историков-марксистов (マルクス主義歴史家協会)

Рабочий факультет (労働者予科)

Факультет общественных наук (社会科学部)

※ 参照文献

- Академическое дело 1929–1931 гг. вып. 1 Дело по обвинению академика С. Ф. Платонова. СПб., 1993
- Акиньшин, А. Н. Судьба краеведов. (конец 20–х–начало 30–х годов.) Вop. Ист. 1992 № 6–7
- Алаторцева, А. И. Журнал "Историк-Марксист" 1926–1941 гг. М., 1979
- Алексеева, Г. Д. Октябрьская революция и историческая наука в России. М., 1968
- Андреев, А. И. Очерки по источниковедению Сибири. вып. 1 М-Л., 1940 2-ое. М., 1960 вып. 2 М-Л., 1965
- (ред.) Петр Великий. сб. ст. М-Л., 1947
- Артизов, А. Н. Критика М. Н. Покровского и его школы. Ист. СССР. 1991 № 1
- Судьбы историков школы М. Н. Покровского. (середина 1930–х годов.) Вop. Ист. 1994 № 7
- Историографические семинары М. Н. Покровского. История и историки. М., 1995
- Брачев, В. С. <Дело> академика С. Ф. Платонова. Вop. Ист. 1989 № 5
- Верченко, М. А. Восстановление исторического факультета и его роль в борьбе за подготовку кадров историков-марксистов. Из истории Московского университета, 1917–1941. М., 1955
- Воспоминания Е. Н. Кушевой. Отеч. Ист. 1993 № 4
- Генкина, Э. Б. Воспоминания об ИКП. История и историки. Историографический ежегодник 1981. М., 1985
- Данилова, Л. В. Становление марксистского направления в советской историографии эпохи феодализма. Ист зап. т. 76 1965
- Гутонова, Е. В. На истфаке. Вестник МГУ. сер. 8 1993 № 6
- Дорошенко, В. А. Образование и основные этапы деятельности общества историков-марксистов. 1925–1932 гг. Вестник МГУ. сер. 8 1966 № 3
- Дружинин, Н. М. Избранные труды. т. 1–4 М., 1985–1990
- Государственные крестьяне и реформа П. Д. Киселева. т. 1 М-Л., 1946
- Иванова, Л. В. У истоков советской исторической науки. Подготовка кадров историков-марксистов в 1917–1929 гг. М., 1968
- Археографическая комиссия 1917–1931 гг. Проблемы истории общественного движения и историографии. сб. ст. М., 1971
- Историческая наука в Московском университете. 1934–1984. М., 1985
- К истории института красной профессуры. Ист. архив. 1958 № 6

- Калистратова, Т. И. Источники по преподаванию и изучению истории в Московском государственном университете 1917–1931 гг. Вестник МГУ. сер. 8 1984 № 1
- Институт истории ФОН МГУ-РАНИОН. 1921–1929 Н. Новгород. 1992
- Кривошев, Ю. В. Дворниченко, А. Ю. Изгнание науки. Российская историография в 20–х–начале 30–х годов XX века. Отеч. ист. 1994 № 3
- Мезен, С. А. Историческому факультету Саратовского университета 50 лет. Ист. СССР 1985 № 5
- Новосельский, А. А. Побег крестьян и холопов в Московском государстве во второй половине XVII в. Труды Института истории РАНИОН. вып. 1 М., 1926
- Вотчинник и его хозяйство в XVII веке. М., 1929
- Борьба Московского государства с татарами в первой половине XVII века. М.-Л., 1948
- Исследования по истории эпохи феодаизма. М., 1994
- Очерки истории исторической науки в СССР. т. 4 М., 1966 т. 5 М., 1985
- Подъяпольская, Е. П. Об истории и научном значении издания «Письма и бумаги императора Петра Великого.» Археографический ежегодник за 1972 г. М., 1974
- Покровский, М. Н. Историческая наука и борьба классов. вып. 1 М.-Л., 1933
- Простоволосова, Л. Н. Станиславский, А. Л. «Мы учим советских людей, а не древних греков.» Из истории вузовской исторической науки конца 30–40–х гг. Ист. СССР 1989 № 6
- Рослова, А. С. 25 лет работы Московского государственного историко-архивного института. Труды МГИАИ. т. 11 М., 1958
- Серова, Е. А. Историко-археографический институт АН СССР. 1931–1936 гг. История и историки. Историографическая ежегодник 1976 г. М., 1979
- Фроянов, И. Я. Приймак, Н. И. Семенов, Л. С. К 50-летию исторического факультета Ленинградского университета. Вестник ЛГУ. 1984 № 8
- Черепнин, Л. В. Отечественные историки XVIII–XX вв. М., 1984
- А. С. Лаппо-Данилевский—буржуазный историк и источниковед. Вop. Ист. 1949 № 8

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 34*

発行所 東京都国立市中2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1996年3月29日

印刷所 東京都八王子市石川町2951-9

三省堂印刷株式会社

